「夕顔」巻の主題と方法について

――もののけ正体論に触れつつ――

武原弘

「夕顔」巻のなにがしの院に現われたもののけが、その廃院の妖物であったか、あるいは六条御息所の怨霊であったかという問題は、古注以来論議を呼んできたが、[注1]両説とも細部について多くの問題点を残したまま相つぐ修正や訂正を重ね、今日に至ってもますます混迷の度を増すばかりの根深い論争を展開している。問題は確かにいずれにも解しうるような文体の曖昧さにあるのだが、この問題は、もののけの正体の解き明かしという単純な謎解き的興味だけでは堪えられそうもない、さらに重要な課題――源氏物語がまさしく物語文学としてすぐれた達成を得るまでの、すぐれて物語独自の思想的方法的問題の解明――をも含んでいるのである。

本稿は、もののけの正体論を当面の課題としながらも、旧説とはやや視点を異にし、作者の対読者意識の問題を中心として夕顔物語の形成要因――その方法と主題について考察することを主旨としたものである。もののけ正体論争へ介入することが本意でないので、旧説のいちいちの検討批判、論争の史的展開の追跡調査などはここで省略させていただくことにしたが、特に門前真一氏の一連のご論文や深沢三千男氏のご高論[注2][注3]のほか諸論に多大の教示を受けながら論争史の概要をたえず考慮において、いくつかの重要な争点については適宜触れつつ考察を進めていく予定である。なお、テキストには池田亀鑑校註「源氏物語」一（朝日新聞社）を用い、本文引用ではその頁数を示した。

一

「夕顔」巻の基本的性格を確認しておくために、まず、本巻を含めたいわゆる「帚木」三巻（「帚木」「空蟬」「夕顔」諸巻）に注目することからはじめたい。

周知のように、これら「帚木」三巻は一続きの物語として執筆されており、いずれも光源氏と中流階層の女たちとの交渉の物語を描いているが、しばしば指摘されるように、「帚木」巻の冒頭の叙述は「夕顔」巻末尾の叙述と正確な照応関係を示している点からも、三巻の統一性、完結性は明らかである。

「光源氏、名のみことごとしう、言ひ消たれ給ふ咎多かなるに、いとど、かかるすきごとどもを、末の世にも聞き伝えて、軽びたる名をや流さむと、忍び給ひけるかくろへごとをさへ語り伝へけむ人

のもの言ひさがなさよ。さるは、いといたく世を憚り、まめだち給ひける程に、なよびかにをかしき事はなくて、交野の少将には笑はれ給ひけむかし。まだ中将などにものし給ひし時は、内裏にのみ侍ひようし給ひて、大殿にはたえだえ罷で給ふ。しのぶのみだれや、と、疑ひ聞ゆる事もありしかど、さしも、あだめき目馴れたる、うちつけのすきずきしさなどは、好ましからぬ御本性にて、まれにはあながちに引き違へ、心づくしなる事を、御心に思しとどむる癖なむ、あやにくにて、さるまじき御ふるまひもうち交りける」（184～185）

「かやうのくだくだしき事は、あながちに隠へ忍び給ひしもいとほしくて、みな洩しとどめたるを、など帝の御子ならむからに、見む人さへかたほならず、もの蒼めがちなると、つくりごとめきてとりなす人ものし給ひければなむ。あまり物言ひさがなき罪、さりどころなく」（258）

敢えて長い引用を施こしたのは、この部分が和辻哲郎博士のご指摘以来源氏物語成立論争の論拠となったことの重要さのほかに、いかにも歯ぎれの悪い、屈折した草子地の文体においてもほぼ完全に照応している、その全体の文脈を確認したかったからである。文意においてやや通じにくい部分もあるが、要は空蟬や夕顔と光源氏との恋物語が本来の光源氏にとっては「忍び給ひけるかくろへごと」であって「軽びたる名を」流す結果ともなるような「あやにく」の「さるまじき御ふるまひ」で、「くだくだしき事」の打ち明け話に過ぎないということを、読者に対して作者が長々と弁明した叙述であることは明白である。ここでは、これら三巻の物語を傍系物語として本系のそれと明確に区別しようとした作者の意図が露わであると同時に、その弁明の口調の執拗さが私を圧倒するのである。これら三巻の物語を描くときにこれほどの弁明なしには物語ることが出来なかった、作者にとってさし迫った情況とは何か。これほどくどくどしい断わり口上を首尾に置かなくてはこれらの物語を許容してくれそうになかった当時の物語読者の物語意識とはいかなるものであったか。おそらくそれは、当時の物語読者の身分階層の問題と密接に関わっているものと考えられる。

源氏物語の読者層について作品中の草子地を手がかりに考察した先学の諸論も既に多いが、かつて玉上琢弥氏が[注4]説かれたように、一次読者としてはまず権門高貴の姫君たちがあり、その周囲に二次読者として宮仕え女房階級の女性たちがあったことが想定されるのである。氏のご見解には物語音読論への性急な飛躍もあって、中野幸一氏ほか[注5]からの批判も強く出されてはいるが、物語の真の読者がだれであったかという評価の問題はさておいて、現象として顕われた読者層の実態は玉上氏の説かれたとおりであったものと考えてよい。すなわち、源氏物語の作者がまず最初に身近な読者として意識したのは上の品の姫君たちであったため、中の品の女の物語を描いた「帚木」三巻には前掲の如き巻頭巻末の草子地が必要不可欠だったのである。これと同趣旨の草子地は作品中のほかの部分にも数多く散見されるのであって、例えば、「夕顔」巻・八月十五夜の条で庶民生活を描写したあと「くだくだしき事のみ多かり」（258）と叙

したり、空蟬が伊予介に従って下る折の光源氏との交渉を描く場面で「こまかなる事どもあれど、うるさければ書かず」（287）と詳描をさけたのも、さきの草子地と全く同趣のものである。さらに私は草子地とは認められない客観描写のなかにも草子地の機能と殆ど同様の表現機能をもつ叙述を数多く発見できる。例えば、「夕顔」巻始発の条で夕顔の庶民的な住まいを叙した部分に「桧垣といふもの」「葎のやうなる」「きりかけだつ物」「小家がちに、むつかしげなるわたり」といった間接化表現がめだつのは、上流貴族の読者に対してこのような下層階級の住居の様を直接的に提示することが憚られたからであろうし、しばらくの後門を開けて出てきた惟光が源氏に向かって「物のあやめ見給へ分くべき人も侍らぬわたりなれど、らうがはしき大路に立ちおはしまして」（243）とことわりを述べた詞も、この場の挨拶としてはやや説明的過ぎて、むしろ作者の読者に対する釈明と受けとられなくもない。さらに、八月十五夜の夕顔の宿の条で、むさくるしい庶民の生活を叙したあと「くだくだしき事のみ多かり」と思いきった省筆に従ったところで、筆を転じて「白妙の衣うつ砧の音……空飛ぶ雁の声」（258）という情趣豊かな自然描写に移行しているのも、それまでの読者の異和感を除去するための作者の周到な用意と考えることができるのである。

このような対読者意識によって導かれた作者の表現技法は単にこうした叙述の細部のみに見られるのではない。「帚木」巻前半の雨夜の品定めにおける中の品女性論は、言うまでもなく、後に展開される空蟬物語・夕顔物語の序に相当するものだが、このような導入部を前提にしないではすまされなかった対読者意識とは、中流・下流の女の物語に対して生じるであろう読者の無用の反撥や抵抗を未前に防ごうとした作者の配慮を意味するのである。中野幸一氏は、雨夜の品定めにおける女性論が結論において中の品の女性をよしとしている点を指摘して、源氏物語の読者が一部の権門の姫君など上の品の女性であったとする見解を否定しておられるが、[注6] 私には必ずしも賛同できない。何故なら、雨夜の品定めにおける女性論はその結論において確かに中の品の女性推賞論とはなっているものの、論理の展開過程には奇妙が屈折があり、必ずしも明解直截な論理とはなっていない。興味深いのはその偽装と虚構にみたされた文体である。話題にのぼる中の品女性たちは、程度の差こそあれ殆どみな戯画化されていて、その欠点を語る口調にはどこかに揶揄の響きさえある。当の光源氏は終始聞き役にまわって、時に居眠りさえするほどの傍観者ぶりである。話題の女性群像は光源氏にとって単なる好奇心の対象とはなり得ても、決して真剣な恋の相手ではないということを作者は言おうとしているのであって、事実、品定めのさ中にあって光源氏の胸中は「人ひとりの御有様」藤壺のイメージを追い求めるだけであった（212）。議論の場そのものが、天下に名だたる好色貴公子たちの退屈凌ぎという遊戯的雰囲気に設定されていることなど含めて、総じて、この雨夜の品定めは卒直かつ真摯な女性論とは評し難い。勿論、これは巧妙に偽装された作者のポーズに過ぎない。作者の真意は確実に中の品女性の推賞という一点に集中していたのだが、それを物語るには、上の品の女性を主とした読者に対してそのようなポーズを余儀なくされたのであろう。雨夜の品定めにおける女性論が光源氏のために準備された作中人物論であると

も、作者自身の女性観の吐露であるとも両様に評されているが、[注7] おそらくその両者を同時に意味するものとするのが最も正当な解釈であろう。

このように見てくれば、中流階級の女性の物語が可能となるために、身分の問題を中核とする作者の対読者意識がいかに強烈に作用していたかが、ほぼ明瞭となってくる。その対読者意識は「帚木」三巻に一貫して持続され、やがて物語の内的世界――物語の構想や人物の造型法にまで深々と関わってくるのであって、夕顔物語も当然この前提条件の埒外にあることは許されなかったのである。

二

ここで「夕顔」巻のもののけの正体論に触れたい。

もののけの正体を六条御息所の怨霊と見る立場の最大の難点は、六条御息所は夕顔の存在を知らず源氏と夕顔の恋愛関係についても全く聞知していない点ではあるまいか。

本文に即して見れば、源氏と夕顔の恋愛行動は確かに絶えず六条御息所と対比して描写されている。住まいの様子（247）、性格（251～252）などについての対比が進んで、もののけ出現の直前の叙述「六条わたりにも、いかに思ひ乱れ給ふらむ、うらみられむに、苦しう道理なり、といとほしき筋は、先づ思ひ聞え給ふ。何心もなきさしむかひを、あはれと思すままに、あまり心深く、見る人も苦しき御有様を、すこし取り棄てばや、と思ひくらべられ給ひけり」（263）において対比描写は極限に至ったかに見える。（「六条わたり」の女が六条御息所をさすことは今さら言うまでもない。）

しかし、御息所と夕顔との現実的具体人間関係が皆無である以上これは単なる、平板な二者対照の描写に過ぎないのであって、御息所がもののけとなって夕顔にとりつくという、劇的な三角関係の実体を準備する文脈と受けとめるにはあまりに不備不足である。本文にそれとはっきり叙述しなくても御息所が源氏と夕顔の恋愛関係については既に感知していて、嫉妬と怨念に身を焦していた事情を読者はこうした対比描写の文脈の背後に読みとっていくべきだとの見解もあるが、そのような描法は私には限度を越えた省筆として、作品形象にとって重大な欠陥をもたらすものとしか考えられない。

要するにこの御息所と夕顔の対比描写は、極端に対照的な人物を並列して描くことによって両者の人物像（身分・教養・性格）の相違をより効果的に印象づけるための、特にここでは夕顔の人物像を鮮明にするための、単純な二者対照法に過ぎないのであって、それ以上ではない。このような対照法は源氏物語の作者が好んで用いた手法であって、例えば空蟬と軒端荻の人物描写も全く同趣向のものである。

思うに、夕顔は当初「下の品」の女として源氏の前に登場している。「かの下が下と、人の思ひ棄てし住なれど、その中にも、思の外の口惜しからぬを見つけたらば」（248）「仮にても、宿れる住の程を思ふに、これこそ、かの人の定めあなづりし下の品ならめ、その中に、思の外にをかしき事あらば」（254）などの叙述で、夕顔の身分の卑しさが強調されている。源氏の夕顔に対する気持が単なる好奇心に過ぎないことの強調も同時に注意すべきである。このよう

な夕顔に比して、六条御息所は前東宮の妃という前身をもつ、いわば「上が上の品」の女性である。あらゆる点において夕顔とは比較にならない高さにある女性である。

いわば両極端にあるこの両者が同じ恋の対抗者として相争うということがあり得るであろうか。まして、六条御息所が嫉妬に狂乱してもののけと化し夕顔にとりつくというようなことは考えられそうもない。後の巻々で六条御息所の怨霊がとりついた女は、葵上・紫上・女三宮など、みな皇族に出自をもつ高貴の女性ばかりで、それぞれ源氏の正妻かそれに匹敵する地位にあって源氏の愛を専有していた人物ばかりである。もともと嫉妬心とはそのような対等のレベルにある競争者にのみ向けられる情念ではないだろうか。夕顔をとり殺したもののけが六条御息所の怨霊であったとは考えられない所以である。

だが、私が強調したいのはむしろ次の点である。すなわち、本来六条御息所という高貴な女性の登場する場ではない「夕顔」巻に――この巻は雨夜の品定めによって触発された中の品の女に対する源氏の好奇心の物語だけでよかったはずである――彼女を引き出してしまいながら、しかも御息所と夕顔の確執はありうべからざることとしてこれを峻拒し、得体の知れないもののけを出現させて夕顔を死なせてしまうこの物語を要請し、許容し、歓迎したのは、当の上流貴族女性を主体とした物語読者自身であったということをここで再確認すべきである。六条御息所の怨霊では決してない、このものけの正体を最もよく知っていたのは、実際、読者自身だったのである。

三

読者に対する周到緻密な用意にもかかわらず、いやそれ故にこそ、およそ結ばれるはずもない源氏と夕顔の恋路の行方を、当時の読者は興味深く見守っていったに相違ない。それは、未知の世界の女に対して喚起された源氏の好奇心と殆ど表裏一体をなす読者の心理でもある。近づくにつれてこの下流女性夕顔の容姿や性格が徐々に明らかになってくる。「いとあさましく柔かにおほどきて、もの深く重き方は後れて、ひたぶるに苦びたる」(255)夕顔の人柄に源氏はすっかり魅了されていく。当初は単なる好奇心に過ぎなかったのであるが、やがて源氏はこの女に魂奪われ恋のとりことなってしまうのである。「今朝の程昼間の隔もおぼつかなくなど、思ひわづらはれ給へば、かつはいとものの狂しく」(255)「人目をおぼして、隔ておき給ふ夜な夜ななどは、いと忍びがたく、苦しきまでおぼえ給へばなほ誰となくて二条の院に迎へてむ、もし聞えありて便なかるべき事なりとも、さるべきにこそは。わが心ながら、いとかく人にしむことは無きを、いかなる契にかはありけむ、など思ほし寄る」(256)いわば、恥も外聞もなく、名誉も地位も投げうっての灼熱の恋である。光源氏という理想の貴公子が、こともあろうにこのような下流の女にこれほどまで熱中しようとは奇しくもあやにくな運命ではある……。いささか想像を逞しうすれば、当時の物語読者が理想の主人公として賛美し憧憬した光源氏の恋も、このあたりが限度ではなかったか?

下流の女夕顔への光源氏のこれ以上の惑溺は読者の許容限度を越

えるものであったに相違あるまい。光源氏はあくまでも物語の主人公としての理想性を保持し続けなければならない。彼には葵上や藤壺、六条御息所や朝顔などの高貴な女性との恋愛交渉が継続中である。夕顔の如き下の品の女には好奇心以上の愛情は分不相応ではないか……。

おそらく作者はそのような読者の心理を計算しながら、極限まできたこのやっかいな恋の収拾を急がなければならなかったのである。収拾の手だてはいくつかある。夕顔に身を引かせるか――この方法は前の「帚木」巻で頭中将との恋の結末で使用済みである。夕顔に源氏を拒ませるか――この方法も空蟬物語で検証済みであり、また、夕顔の性格上不適当である。夕顔を殺すか――これが残された唯一の方法であるが、きわめて危険な方法である。誰が、いつ、どのような方法で?そこで作者の想念に浮かび上がってきたのが、もののけ出現と夕顔怪死の物語の構想ではなかったか。

光源氏と夕顔の愛情交流が最も高まる八月十五夜の場面の前後から、作者は夕顔怪死事件への伏線を周到な用意のもとにめぐらしはじめている。まず第一は怪奇的描写を多くしてきていること。例えば「様をかへ、顔をもほの見せ給はず、夜深き程に、人をしづめて出入などし給へば、者ありけむものの変化めきて」(255)や「げに何れか狐なるらむな」(256)などの叙述は、なにがしの院の怪奇的雰囲気に直結する文脈になっている。なにがしの院の荒廃と鬼気迫る夕闇の精密をきわめた写実的描写は、言うまでもなく、もののけの出現のための舞台装置である。伏線の第二は早くから夕顔の死を暗示する叙述がみられる点である。例えば「いさよふ月に、ゆくりなくあくがれむことを、女は思ひやすらひ、とかく宣ふ程、にはかに雲がくれて」(260)とあるのは明らかに女の死の予告である。また、なにがしの院に着いた直後に女が詠んだ歌「山の端の心も知らで行く月はうはの空にて影や絶えなむ」(260)にはそのことはいっそう明白である。第三は、第二の死の予告描写とも関連するが、夕顔のひどくもの怖ぢする性格の描写である。「もの恐しうすごげに思ひたれば」(260)「たとしへなく静なる夕の空をながめ給ひて、奥の方は暗うものむつかし、と女は思ひたれば」(263)「物をいと恐しと思ひたる様」(同)など、もののけに襲われたときの夕顔のもの怖ぢぶりの伏線となっている。このような憶病で気弱な夕顔の人物像は源氏と夕顔の最初の出会いを叙した段で、自ら進んで源氏に歌を詠みかけてきた夕顔とは著しくかけ離れたものとなってきているが、もののけにとり殺される夕顔像の造型を作者が徐々にもくろみはじめたことを示すものである。

これらの入念な伏線描写によって、物語はもののけの出現と夕顔の急死というクライマックスへと急ぎ展開していくのである。そのときのもののけが何であったか。言うまでもなく、それはその廃院に住みついていた妖物であるが、ただ、その妖物が「いとをかしげなる」女となって現われたところにこの物語の独自な方法が看取されるのである。

このもののけ出現の物語が、「江談抄」第三に見られる源融の亡霊にまつわる怪奇説話を踏まえて構想されたものであることは、つとに指摘されてきたとおりだが、ここで作者はその昔物語に安易に依拠してしまうことなく、巧みな換骨奪胎によって見事な怪奇小説

に仕立て上げたのである。もののけの出現を必然的ならしめるための精巧な情況設定、緊迫感をもりあげるための精密な心理描写は比類のないものだが、最も注目すべきは、この物語においてはもののけを「いとをかしげなる」女に変えている点であろう。しかも「己がいとめでたしと見奉るをば……」と怨言を吐くのであるが、これは上流貴族の女性たちを主たる対象とした物語読者に対して、生々しい人間関係の確執を想起させる、ドラマティックな構成の物語形象となり得ているのである。このもののけの正体とは、だれか特定の一女性をさすのではなく、むしろだれでもよい、下の品の女でありながらあれほど源氏から熱愛され、高貴な葵上や六条御息所をさみしがらせる結果をもたらした夕顔に嫉妬と反感を抱いた読者たちが喚び出した、幻の女である。読者自身の内界に無意識の裡に型どられていた、夕顔への殺意にみちた妄念がこのようなもののけの出現をむしろ期待していたことを、作者は計算ずみであった。極言して、このもののけの女は読者自身の――権門高貴の姫君たちの夕顔に対する怨念であったという言い方もあながち不当なものではあるまい。

既述したように、「帚木」三巻の物語がしたたかな対読者意識によって領導されて展開したものであることを知れば、この夕顔物語におけるもののけ出現も夕顔怪死事件も当然その条件下に構想されたものとみなくてはなるまい。結ばれるべくもない源氏と夕顔の恋が、もののけの出現という超現実的契機の導入によっていっそう完全な虚構世界を形成し、その虚構化の故に必然化された夕顔の急死は読者に受け入れられ、主人公光源氏の理想性もまた読者に保全され得たのである。作者の計算された筆運びと巧妙なテクニックを見るのである。しかも、夕顔怪死というクライマックス後の物語展開においても、作者の用意周到な表現の営為はいささかもゆるむことはない。夕顔を失なった直後の光源氏の痛切な悲傷が綿々と描き尽くされ、さらに夕顔の死を世間から完全に隠蔽することによって源氏を醜聞から守るのは、いかなる女性をも最後まで愛しぬく源氏の誠実さと理想性を維持するための細部叙述（ディテール）として重要な役割を果している。さらに注意すべきは、ここに至って本文ははじめて夕顔の素姓に触れ、これまで下の品として見られていた彼女が実際には中の品の女性で、光源氏にふさわしい高貴の出自にはないまでも、好奇の対象としてはとにかく許容され得る女性像であることを証言している。いうまでもなく、雨夜の品定めを直接に承けた、まぎれもない中の品の女の物語であったことの証言である。それは、登場人物右近の会話中に叙せられてはいるが、見方を変えれば夕顔に対していささか反感と嫉妬を抱いていた読者に対する作者の弁明であり、一種のアフタケアともなっている。ここではじめて読者は夕顔に対し同情と哀惜の感を強くしたであろう。読者たちは、主人公光源氏とともに、この薄幸の女夕顔の急死をいたみ悲しむほかなかったであろう。

四

それにしても、このような巧妙で怪奇性に富んだ物語手法によって展開された夕顔の物語で語ろうとしている作者の真意とは何であ

ろうか。

既述のように、源氏と夕顔の出会いは、当初、未知の世界である下層階級の女に対する源氏の一時的好奇心から始発した。そしてそれは、当時源氏をとりまいていた上流階級の女性――葵上・六条御息所・藤壺との満たされぬ愛の補償作用としての意味をもっていた。とりわけ、藤壺への熱烈な思慕の情は満たされないことによってますます激化し源氏を一時的な好色的行動に走らせた。ところが、夕顔に対する源氏の愛情はいつしかこのような好奇心の域を超え出て、本格的な、真実の愛へと高潮していった。この女との愛を全うするためには全てを投げうってもよいと考えるほど源氏の恋情は燃えさかった。それほど夕顔は源氏にとって魅力的であったが、その夕顔の魅力とはひとえに彼女の人柄（人格）に起因するものであって、「品」（出自・身分・社会的地位）とは無関係の、独立した一人の女性（人間）の人格がもつ魅力であった点に留意すべきである。かつて雨夜の品定めで馬頭が「今はただ品にもよらじ。容貌をばさらにもいはじ。…ただ偏に物まめやかに、静かなる心の趣ならむよるべをぞ、つひの頼み所には思ひ置くべかりける」（193）と力説した女性像とは、この夕顔の人間像にほかならないことが知れるのである。このようにすぐれた女性は中の品にしか求められないとも彼等は語っていた。源氏自身もまた貴族社会に身を置いているが故のいっさいの制約をいま放棄して一人の独立した人間（男性）として夕顔と相対したのである。両者が互に名前も素姓も明かさず顔さえ隠して対座している場面は、この意味の故にきわめて象徴的である。ここでは純粋な愛の交流のほかいっさいが無意味である。有意味なものは真心と愛による人間の信頼だけである。

もののけの出現によって夕顔の急死にあった光源氏の悲傷痛恨がいかに深かったかは、それにまつわる哀感切々たる長い叙述を読めば既に明白である。源氏は彼の青春時代の最も大切な純愛と真実の対象を失なったのである。源氏は終生、この夕顔を忘れることがなかった。（後の「末摘花」「玉鬘」諸巻にも亡き夕顔を追慕する源氏の心中が語られている。）

木村正中氏は次のように述べておられる。[注8]「思うに、夕顔の物語がその根源で追求しようとした世界は、光源氏が社会的身分や階層的制約を離れ、解放された一個の男性として、また何処の誰ともわからず、「ただいとらうたく見ゆ」る相手の女に、一途な愛を傾けていくところにあるのではないか。（中略）怪奇と恐怖の中での無慚な女の死をもって報いられなければならないほどに、あやしく、はかなく、それだけ美しかった源氏と夕顔とのほとんど地上的でない純愛が、人生批判としての源氏物語の深刻な主題性の一端を担いえたのだ。」まことに示唆深いご高説である。

夕顔は、その花の名にふさわしく美しくはかなく消え果てた。その生涯は哀しくも悲劇的な短い生涯ではあったが、彼女は光源氏の純粋な愛を一身に受け、死の瞬間に至るまで源氏のやさしさと誠意を素直に信じてこれに従った。この従順で素直な夕顔の人柄は、一見児めかしい頼りなさを思わせもしたのだが、夕顔はこの人柄の故に源氏に愛され、その死によって永遠の恋人として源氏の中に生き続けたのである。源氏と夕顔の純愛は夕顔の急死という悲劇的代償をもってはじめて全うされはしたが、このような夕顔のはかない生

涯を人は不幸な生涯と呼ぶべきであろうか。後に、源氏物語を耽読した更級日記の作者が多感な夢多い青春時代の偶像として、この物語の浮舟と夕顔を思い憧れたのも故なきことではなかった。

ただ私がこの夕顔の物語を辿りつつ考えるのは、このように美しく清らかな純愛と人生の真実が、ほかならぬ夕顔という中の品の女との間にしか求められなかった光源氏世界の情況とはなにか、ということである。くり返したように、源氏と夕顔とは、はじめから結ばれるべくもない悲劇的宿命を負った恋に陥ったが、そこに花咲いた愛の世界こそは、光源氏をとりまく上流貴族の世界では見い出すことも求めることもできない、しかし人間にとって欠けがえのない愛と信頼の世界であった。ここには当時の荒廃した貴族社会に対する作者の批判が確実にこめられていたのだが、しかし、そのことがむしろ読者には見取られないほどに巧妙な虚構化と偽装によってしか物語られ得なかった作者の情況こそ、悲劇的であったと言わなくてはならない。当時の物語読者が直接的には上の品の階層の女性たちであり、それに奉仕する作者が中の品の女性であったことは、二重三重にこの物語の構想や方法を制約したのであるが、それらの凝らされた多様の趣向の背後に、真実の愛を求めて迷いつづける人間存在の不確かさを認識し、同時に当時の貴族社会に対する鋭い批判の眼を向け続けた作者自身がいたのである。当時の読者がどれほどその作者の眼光を感じとっていたかは明確でないが、私見では、直接の一次読者である上流貴族階級の女性たちにはむしろ隠蔽された形で、真の物語読者としての主体性を荷った中流階層の女性たちこそ、作者のそうした人生批判、社会批判を読みとっていったのではないかと考えられるのである。

ともかく、夕顔にあのような急死をもたらしたもののけの正体はだれか。少くとも六条御息所の怨霊でないことは確かだが、私はむしろ、作者にとっても読者にとってもその正体は実はだれであってもよかったのではないかとさえ考えて、この物語の構想や手法の背景を探ぐろうとしてみた。

注1　古注前期のものには特に注はないが、大鏡、江談抄の故事説話が注記してあり、「花鳥余情」「細流抄」などで怨霊説の立場による注があり、「評釈」で妖物説に戻っているようである。近代は両説相拮抗している。

注2　「源氏物語の構想について」（「国語国文の研究」昭4・5、7）をはじめとして、この問題についての論文を計8点も集中的に発表されている。「源氏物語新見」（昭40・3）に詳しい。

注3　「源氏物語の構想分析―夕顔怪死事件についての一考察―」（「国語と国文学」昭38・10）

注4　「源氏物語の読者」（「女子大文学」第七号、昭30・3）「平安文学の読者層」（「国文学論叢」第三輯、昭34・11）

注5　「古代物語の読者の問題―物語音読論批判―」（「早稲田大学「学術研究」第十二号、昭38・12）「源氏物語の草子地と物語音読論」（前同、第十三号、昭39・12）ほかに、今井源衛氏「享受の問題」（「源氏物語必携」所収、学燈社、昭42・4）や今井卓爾氏「源氏物語の創作

態度」（「源氏物語講座」第一巻、有精堂、昭46・5）など参照。

注6　注5参照

注7　阿部秋生氏「源氏物語研究序説」で前者が強調されている。

注8　「夕顔」巻解説（「国文学」昭41・6）

追補・問題のもののけの怨言「己がいとめでたしと見奉るを、尋ね思ほさで……」の解釈に諸説あるが、もののけの女の正体を上述した卑見のように解すれば、諸々の疑点も氷解し、合理的な通釈を得ることができる。